道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

三好礼子
エッセイスト・国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

アイガーに続いて8月末に出場したトレランレースは、「ウルトラトレイル・デュ・モンブラン」。今回は3回目だったので、100マイルのUTMBではなく、119キロのTDSというクラスを選びました。TDSは「サヴォワ公爵の辿った道」という意味で、イタリアのクールマイユールから、時計回りでフランスのシャモニーへ向かいます。その殆どが厳しい山岳地帯で、一気に1800m登ったり、果てなき峠を延々と越えたり、下ったり。セントバーナード犬で有名なサン・ベルナールを通過するのが楽しみでしたが、100マイルのUTMBよりも難しいとされるクラスで、睡魔と吐き気（暑かったため、今年は殆どの人が胃にきたようです）に悩まされながら、なんとか制限時間の一時間半前の31時間36分でゴール。途中に見た素晴らしい光景は、確かに世界のどのレースにも負けない魅力がありました。何度「ひゃーっ、信じられない」と叫び、前後の海外選手に声を掛けたことでしょう。終わった時は「もうお腹いっぱい」で、次のレースなど考えられませんでしたが、今は「もう一度あの光景が見たい」という気持ちが沸々。それが一番怖い…。

さて、今回はそのレースの前後、バスや車や乗用車であらゆる所を駆け回りました。氷河を見て、崖をクライミングして、峠で別のクラスを応援して、国境に行って美味しいガレットやクレープを快食。レースだけではなく、その旅こそが観光（光を観る）なので、とにかく満喫しました。どれもこれも満点の楽しさだったのですが、一番印象的だったのは、山岳観光で有名なツェルマット。たまたま宿主の神田さんに「今からオートルートの縦走ツアーを迎えに行くけれど、礼子さんも行く？」と誘われて実現した私のツェルマット行き。二つ返事で同行させて戴き、2時間移動してスイスへ入りました。アイガーのグリンデルワルドも感動でしたが、ここは更に洗練され、まるで山岳銀座。小さな町なのにどうしてここまでまとまっているかというと、それはエコを掲げた町づくりが大成功しているからでした。

知識ほぼゼロで入って仰天。まず自家用車は途中で規制され、降りてタクシーで町へ。確かにすれ違いが困難な細い街道を往くのですが、道路拡張は敢えてしない？のかも。そして町中にある電車の終点で下車すると、そこは小型車や馬車が行き交う不思議な世界。シャモニー暦45年の神田さんの説明で、ここにある車はすべてツェルマットで製作している電気自動車で、ゴミ収集などの公共車も同じと判明。燃料スタンドもあった！ 様々な色やデザインが行き交い、強烈なインパクト。何処へ行くにも歩いて移動できる距離なので、人々はゆったりと散策していました。ネズミ返しのある古い穀物庫や家畜も上手に取り入れられ、飽きる暇もなし。子供から老人に至るまで、みんなザックが傍らにあるアウトドアスタイルでしたが、ここほどそれが似合う町もないかも。さすが世界三大北壁のお膝元。当然廻りには登山やスキールートが数えきれないほどあり、シャモニーを更に小さく濃くした「おとぎの国」。

でも、私がここに来たかったのは、一年前にマッターホルンで行方不明になった知り合いを弔う為でもありました。町中の墓地（当然アルピニストたちの墓がわんさか）に行くと、なんとこの7月、「遭難者たちの共同慰霊碑」が建てられたばかり。名峰を臨むその前で、しっかりと祈りを捧げることが出来ました。トレランを始める前は、山岳訓練しつつ山登りばかりしていた私ですが、「いつかマッターホルン」と思ったことはありません。キリマンジェロは登りたいけれど、アイガーやマッターホルンは根性では登れません。でも、その頂きを目の前にすると、「やっぱり登りたくなるよね～」。

「なぜ山へ登るのか」「なぜ山を走るのか」に理由はありません。自然の中へ回帰する（魂を遊ばせてもらう）手段であり、一番元気になる瞬間が得られるからですが、とにかく楽しいのです。だからこそ元気に帰ってくることが表彰状。今回も無事帰ることができて、ホッとしています。リスクマネージメントを忘れずに、山はUターンが厳守（でも自然が相手なので、こればかりは神のみぞ知る？）。トレランラッシュ、次なる山は、いよいよ9月末の富士山一周「UTMF」です。木花咲耶姫よ、どうか微笑んでくださいね～！

UTMBのトップ選手ゴールを待つ人々。数千人の選手とその家族たちの熱気で、シャモニーは膨らんでいた。

途中で国旗を渡され、大歓声でゴール。実は、53キロのOCCクラスのトップゴールと重なったのでした！

エコな車が似合うツェルマットは、妙高市や京都と所縁あり。きっといつかまた来ると思う。

レース後の地元新聞に「様々な完走者たち」として載っていた私の豪快な笑い。今回の旅を表している？

神田さんのシャレーで集う選手と応援者。美味しい料理と笑いの10日間そのものが、まさにサポート！

身近な道路の生い立ち②
遊歩道から都市再生

東洋大学国際地域学部・准教授　志摩憲寿

ニューヨーク・マンハッタン、いまや有名な観光スポットにもなっている「ハイライン」は、西13丁目やや南より西30丁目やや北のウエストサイド・ヤードへと至る2キロ程度の遊歩道です。この遊歩道、ウエストサイド・ヤードを一端とすることからお分かりになるかもしれませんが、もともとは貨物線でした。

貨物線が敷設されたのは1934年のこと、この辺りで加工された食品などを運ぶものでしたが、貨物輸送が鉄道からトラック輸送が中心となると1980年代にこの貨物線は廃線となりました。廃線後の沿線地区はまさに負の空間。犯罪の温床となり、また、浮浪者も住み着き、マンハッタンでも最悪の地区の一つにあげられるようになり、ニューヨーク市当局も取り壊しを検討し始めることとなりました。

大きな転機が訪れたのは1999年。鉄道関係者らをはじめとする非営利団体「フレンズ・オブ・ハイライン（Friends of the High Line）」が結成され、彼らを中心に線路跡を保全しつつオープンスペースとして活用する機運が高まります。2002年にブルームバーグ市長が就任すると市は取り壊しの方針を撤回し、フレンズ・オブ・ハイラインと連携して遊歩道の整備を進めることとなりました。2009年には遊歩道の一部（西20丁目より南の区間）が供用され、2011年、2014年と少しずつ延伸しました。

このハイライン、もちろん遊歩道としてニューヨーク市民の憩いの場、そして、世界中から観光客が訪れる名所となっていること自体もすばらしいことではありますが、もう一つ特筆すべきは遊歩道の整備をきっかけとして、それまで負の空間であった沿線地区の再生が進んだことにもあります。ちょうどこの頃、一度は打ち棄てられたソーホー地区の再生が進んでいたことの影響もあったことかと思いますが、この沿線地区に着目した画商たちが次々と画廊を構え、若手アーティストの発掘やイベントを開催するようになりました。続いて隠れスポットに敏感な若者が集まるようになると、バーやレストラン、クラブ、ブティックなども出店、地区は流行の先端地として見事に再生したという訳です。

いま私はケニアのナイロビでこの原稿を書いています。ここでもやはり鉄道沿いは負の空間。世界的に有名なキベラ・スラムをはじめ、鉄道沿いは貧困や犯罪をイメージさせる地区でもあります。ハイラインはこうした負の空間を「道」の力で再生させた面白い例だと改めて感じました。

参考文献：フレンズ・オブ・ハイラインhttp://www.thehighline.org/、「特集・ハイライン公園」（ニューヨーク経済新聞、2010年2月2日、http://newyork.keizai.biz/）

ハイラインはいまや観光スポットとなり周辺地区は流行の先端地として再生した。右端には線路跡が見える。

ハッと思いました

何を隠そう、私、日傘をさして歩く女性、特に着物姿の女性にうっとりしていたおませでセンスある子供でした。今ではそんな光景に出逢う事もありません。寂しいばかりです。

さて、今年も半分終わりましたが今年前半の愚策、それはプレミアム付商品券じゃないかな・と思ってます。消費の刺激策として、「地域消費喚起・生活支援型」の交付金2500億円が使われた事業です。

優先配布や買い占めなど当然予測できたことが、案の定多発しました。預けても、何の足しにもならない利息のこのご時世。商品券だと10～20％もお得とあれば誰もが飛び付くのは明々白々！

どこかでは優先配布に不満をぶつけた人たちがいました。ここまでは良しとしても、その人たちも優先券を手にして納得とは？個人主義の横行と言うべきか。

過去に何度も税金をばらまくことで失敗してきたと思うのですが、懲りない面々が多いですね。2500億円も使いたいのなら、学校給食を無料にして、A5ランクのステーキでも食べさせてあげればいいのに。

新国立競技場の問題なんかを見ていると、まさに無責任の極みです。スポーツ関係者、多数の観客が安全である事、将来にわたって誇れる施設である事が第一のはず。

常識的な判断を求める声が届いたのか、計画は一変し、五輪エンブレムも変更とか・・・。デザイナーの先生、建築家の先生、いろんな先生方があたふたしています。でも、誰一人として謝罪するでもなく、ペナルティーを科せられるわけでもなく、どうなってるの？

先日、お酒のメーカーがコマーシャルで「グビグビ、ゴクゴク」と言った飲酒をそそる音を自粛しようと発表しました。それとそのものが、安全に快適に出来る事、パラリンピックに対応した日本らしい気遣い溢れたバリアフリーであるのに、多数の観客が安全に同時期に、選挙権が十八歳になるから酒・たばこも十八歳からOK？と言い出す先生がいたりもします。

天候不順、異常気象、地殻変動など地球の危機が迫っているのでしょうか。人類も少しずつ壊れてきているのかも。

ずいぶん昔の事ですが、ある方に「俺のことを先生と呼ぶな」と言われました。「何故ですか？」、「俺は先生と呼ばれるほどバカじゃない」・・・と。

とにかく、五輪を期に都心のみならず、日本中がセンスのある、やさしい道、安全な街に近づくよう、バカはバカなりの、失礼。賢い知恵をふんだんに発揮して欲しいものです。